医療と信仰の両面から〝人だすけの道〟を歩む

毎日の布教実動 欠かさない〝ようぼく医師〟

永吉美砂子さん

福岡県障がい者リハビリテーションセンター
センター長

医療の〝第一線〟に立ちつつ、毎日の布教実動を欠かさない女性ようぼくがいる。

「福岡県障がい者リハビリテーションセンター」のセンター長を務める永吉美砂子さん（61歳・西北分教会教人・福岡県宗像市）は、身体障害者や高次脳機能障害、発達障害がある人の診療・リハビリテーション（機能回復訓練）を行う脳機能の専門医だ。平成28年、同センター長に就いて以降、利用者の能力や目標に合わせた社会復帰をサポートする、独自の「リハビリテーションプログラム」の導入などに手腕を発揮している。

医師として多忙を極める一方で、10年前の教祖130年祭へ向かう旬に始めた、出勤前と退勤後の〝すき間時間〟を利用した神名流しとにをいがけチラシの配布も欠かさない。

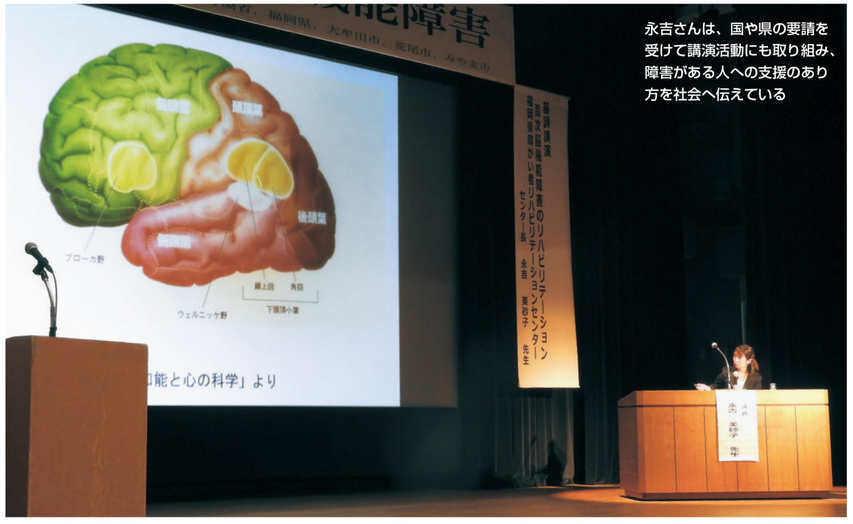
心を入れ替えることで、誰もが楽しく日々を暮らすことができる――。臨床の現場で〝見えにくい障害〟に苦しむ人々に寄り添いながら、地域でさまざまな〝難渋〟を抱える人にも、教えを伝えようと布教実動を続ける永吉さん。ようぼく医師として、医療と信仰の両面から人だすけの道を歩む、その思いに迫った。

（４・５面へ続く）

心と脳の関係を解き明かし〝難渋〟抱える人を救いたい

永吉美砂子さん

61歳・西北分教会教人・福岡県宗像市



永吉さんは、国や県の要請を受けて講演活動にも取り組み、障害がある人への支援のあり方を社会へ伝えている

某月某日午前7時、福岡県宗像市。会社員が行き交うJR東郷駅前に、「よろづよ八首」を唱和する澄んだ声が響く。

「なむてんりわうのみこと――」

神名流しを終えて45分後、ようぼく医師の永吉美砂子さんは、隣の古賀市にある「福岡県障がい者リハビリテーションセンター」で業務開始。身体障害のほか、高次脳機能障害や発達障害など〝見えにくい障害〟に苦しむ人の診療やリハビリテーションを行っている（コラム参照）。

「ようぼくとして、障害がある人たちの心を受けとめ、真摯に寄り添いたい」

出勤前に駅での神名流し10年

毎朝の布教実動を始めたのは10年前。教祖130年祭へ向かうさなか、出勤前に駅前で神名流しをすることを心に定めた。

数日後、不思議なご守護が現れる。父親に「肺がん」が見つかったが、早期発見が功を奏し、手術を受けて1カ月後に退院することができた。

「親神様の鮮やかなご守護と、一層の成人を促される親心を実感した」

〝旬の風〟の後押しを受けた永吉さんは、以後も神名流しを続けた。当初は通行人の冷たい視線を感じることも少なくなかったが、やがて、あいさつしてくる人も現れ、時には悩み事を相談されることも。

「ある日、駅近くの喫茶店のオーナーから『ここの駅は自殺者がいないのよ。天理教さんのおかげね』と話しかけられた。地道に実動を重ねれば、地域でさまざまな〝難渋〟を抱える人のたすかりにつながるかもしれないと思った」

また、布教実動の傍ら『天理時報』の手配りひのきしんに勤しむ中で、地域の教友同士のつながりを持つ大切さを感じた永吉さんは、自ら企画した「ようぼくの集い」を自宅で開催。地域におけるたすけ合いのネットワークづくりにも積極的に取り組んできた。

さらに、自殺者が増える社会状況を憂い、「少しでも踏みとどまる人がいてくれたら」と、仕事帰りににをいがけチラシ20枚を毎日配布。帰宅後も、子育てに悩む知人の相談に乗るなど、おたすけへの思いを行動に移していった。

「たすけを求める人に、お道の教えを伝えられたときが一番うれしい」

永吉さんは、休日も信仰実践を欠かさない。つくし・はこびを心がけ、休日の半分と有給休暇の大半をお道の御用に当て、おぢば帰り、所属教会の月次祭参拝、教区・支部行事への参加にも積極的だ。

「元気で幸せな生活を送れることが本当に有り難い。信仰実践を積み重ね、〝先の楽しみ〟を持って通れば、どんなに忙しい日が続いたとしても、親神様が結構にお連れ通りくださると確信している」

母の出直しを機に教えを求め

高校生のとき、学校の先生や両親に勧められて産業医科大学へ進学。卒業後、リハビリテーション科専門医として県内の病院で勤めるようになった。

信仰2代目。昭和50年、母・佐枝子さんが、自身の身上や、夫が道楽で借金を繰り返す事情に直面したとき、お道の信仰と出合う。永吉さんは学生時代、母親から教えを聞かされたが、当時は信仰を真剣に求めようとはしなかった。

平成11年、佐枝子さんが「肝臓がん」で出直す。〝家族の節〟に長年向き合ってきた、信仰熱心な母が出直したことがショックで、「親神様・教祖の思召は、どこにあるのか」と思いを巡らせた。そして、まずは教えを学び直そうと、自ら信仰を求めるようになる。

所属教会へ足を運ぶことから一歩を踏み出した。その傍ら、父親の借金を返すために懸命に働き、「新築の家が3軒建つくらいの金額を返済した」。

一方、父親のことはどうしても許せず、憎しみだけが募った。それでも、お道の信仰にすがり、所属教会の会長から諭される中で次第に心の向きが変わる。

佐枝子さんの出直しから7年後、父親と向き合うことを決心し、自宅を増築して老人施設から父を迎え入れた。以後、父親が93歳で出直すまでの13年間、家族としての幸せな時間を過ごすことができたという。

「信仰を求めていなければ、私の心の向きは変わらず、父への憎しみで心を倒す日が続いていたかもしれない。〝家族の節〟を通じて、親神様・教祖から大切なことを気づかせてもらった。お道の教えをもとに心を入れ替えることが、すべてのたすかりにつながる。この信仰の有り難さに感激し、神様の存在を身近に感じるようになった」と振り返る。

社会復帰に向け、利用者一人ひとりに向き合う

心の入れ替えが復帰の第一歩

「適切なリハビリテーションと〝心の向きの転換〟によって楽しく暮らせることを、障害がある人に知ってほしい」

永吉さんが考案した「リハビリテーションプログラム」は、利用者一人ひとりに〝オーダーメードのサポート〟を提供するもの。自己実現を諦めず、リハビリテーションに取り組める環境を提供することで、利用者の4割超が社会復帰しているという。

脳機能の専門医として第一線に立つ中で、「かしもの・かりもの」の教えについて思案を重ねる。

「画像所見では異常がないのに、身体の痛みを訴える人がいる。『病の元は心から』と教えられるように、心の入れ替えによって、脳から身体に発せられる命令も変化する可能性があるのでは」

1年前、センター内で楽器の演奏会を催した。利用者がマヒの無いほうの手足でドラム演奏などを練習し、披露する場を設けることで、達成感と希望を持てるようにするのがねらいだった。

「障害のある人が『できることがたくさんある』と感じて、社会復帰する姿を数多く見てきた。心の入れ替えにつながるきっかけを提供し、未来への第一歩を踏み出してもらうことが楽しみ」と語る。

とはいえ、全員が社会復帰できるわけではない。そうした人が〝生きる力〟を身に付けるために、社会復帰を目標とする「医療の視点」だけでなく、どうすれば幸せになれるのかを考える「お道の視点」が欠かせないと永吉さんは強調する。

「リハビリテーションがうまくいかず、将来に不安を抱える利用者に、『これからは、あなたと同じように悩んでいる人の手助けをしてほしい』と伝えている」◇

毎月のおぢば帰りも欠かさない

現在、国や県の要請を受け、講演活動に取り組んでいる。時には、福岡教区布教部主催のシンポジウムにパネリストとして登壇し、信仰実践を発表することも。

ようぼく医師として長年、臨床の現場で尽力してきた永吉さんは、年祭活動に入ったいま、新たな目標を掲げる。

「『このよふのもとはじまりのねをほらそちからあるならほりきりてみよ』（おふでさき第五号85）とお教えくださるように、脳機能を専門とする医師として、元初まりの教えをもとに、心と脳の関係を研究することが、私に与えられた使命だと思っている。これからも医療と信仰の両面から人だすけの道を歩み、さまざまな〝難渋〟を抱える人たちに寄り添っていきたい」と語った。

文＝久保加津真

COLUMN

「高次脳機能障害」とは、病気や交通事故などで脳の一部を損傷し、脳の認知機能に障害が起きた状態のこと。

「福岡県障がい者リハビリテーションセンター」は、利用者の自立した生活と地域社会への参加を支援している。高次脳機能障害や発達障害などにより、社会復帰を諦める人が少なくないなか、利用者の能力や目標、QOL（生活の質）に合わせた社会復帰を想定し、実践的なプログラムを提供している。